

Present for you

鹿児島高等学校 二年

福元彬人

「地下に入るけど暗いのは大丈夫かな、お嬢ちゃん」

男【ここではRと呼称する】は、一緒に走っている少女に声をかける。二人の向かう先には屋根のついた、下り階段の入口があった。少女は走りながら小さく頷き、二人が階段を下りて誰もいない地下鉄のホームの奥へと進んでいくと、階段の上から数人の声が聞こえた。

「大丈夫、こっち、こっち」

Rは場違いに声を弾ませながら、少女を停車していた電車に乗せると、

「じゃちよつと待っていてね、すぐ戻るから」

Rは少女を電車においてホームに向かった。

先程、男と少女が下りた階段を数人の男達が下りていた。

男達は格好こそどこにでもいる若者に見えるが、持っている自動小銃の構え方や動きから只者ではないことがわかる。

「おー、たくさん来たね」

男達が階段を下りてくる様子を少女と別れたRが物陰から覗いていた。覗きながら、Rは懐から煙幕手榴弾を右手で一

つ抜き出した。Rは煙幕手榴弾の脇についているレバーをしっかりと握ったまま、先端についているピンを、口で引き抜いて捨てた。

「さあ、パーティーを始めよう」

男達が階段を降りきったところで、Rが煙幕手榴弾を男達に放った。煙幕手榴弾の転がる音がホーム中に反響し、反応した男達が自動小銃を一斉に撃つと煙幕手榴弾から緑色の煙が大量に吹き出し、ホームは緑一色に染まってしまった。

自動小銃の発砲音や混乱する男達の声が煙の中で響く中、Rは鼻歌交じりに煙が届いていない脇を歩きながら、懐から今度は殺傷能力のある破片手榴弾を取り出した。口でピンを引き抜いて捨て、落ちていた新聞紙で包むと、

「Present for you」

煙の中に放った。数秒後、破片手榴弾が爆発した。爆発の煙が晴れる中、Rは肩に吊っていた自動小銃を構えながら、ホームを見渡す。ホームには飛び散った破片で倒れている男達がいた。人の形をとどめていないやつもいたが、Rは倒れている男達の頭を自動小銃で撃ち抜いていった。

「おーい、もう大丈夫だよー」

Rは電車から少女を降ろすと、そのまま線路に降りてトンネルを歩き始めた。少女の手をしっかりと握りながら。

(作者注) この作品は、未完成です。これからも続書きを書い

ていきたいと思えます。